

『キリストの友人』 ヨハネの福音書 3章 22~30 節

1. 主イエスとヨハネ

本日の 22 節からの後半部分では、再びバプテスマのヨハネのことが記されています。22 節に「**その後、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らとともにそこに滞在して、バプテスマを授けておられた。**」とありますが、イエス様がバプテスマを授けておられたことが語られています。しかし他の三つの福音書には、イエス様がバプテスマを授けたことは語られていません。イエス様ご自身がバプテスマを受けたと語っているのは、ヨハネの福音書のみなのです。また、ヨハネの福音書は、バプテスマのヨハネが投獄される前に、イエス様の働きが始まったように記されています。それは、30 節の「**あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。**」という、バプテスマのヨハネの告白を引き出すためだったのでしょうか。

ヨハネはイエス様のことを証しするために神から遣わされた人であり、イエス様がこの世に現れることの備えとしてバプテスマを授けていました。そのヨハネとイエス様が同じ時期に活動していたと語られていることも他の三つの福音書とは違っています。例えばマルコの福音書 1 章 14 節には、「**ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて言われた。**」とあります。このようにバプテスマのヨハネがヘロデによって捕えられた後で、イエス様の活動が始まったと語られています。ですからヨハネとイエス様の活動は重なっていません。しかしヨハネの福音書は、ヨハネとイエス様が同じ時期にバプテスマを授けていたことがある、と語っています。歴史的事実はどうだったのかについては、学者の間でも意見が分かれています。それは、今はもう確かめようのないことです。しかしヨハネの福音書がこのようにヨハネの活動とイエス様の活動が重なっていたことを語り、しかもイエス様もヨハネと同じようにバプテスマを授けていたと語っていることには、一つの意図があります。その意図とは、バプテスマのヨハネとイエス様とを比較して、両者の関係を明確にする、ということです。

2. 弟子たちの戸惑い

25 節には、ヨハネの弟子たちが出て来ます。そのことは 1 章 35 節に「**その翌日、ヨハネは再び二人の弟子とともに立っていた。**」と語られていました。ヨハネの弟子だったアンデレともう一人の人が、ヨハネがイエス様のことを「**見よ、神の子羊**」(1:36) と言ったのを聞いてイエス様に従っていった、つまりイエス様の弟子になったのです。

26 節でヨハネの弟子たちは、ヨハネに「**先生。ヨルダンの川向こうで先生と一緒にいて、先生が証されたあの方が、なんと、バプテスマを授けておられます。そして、皆があの方のほうに行っています。**」と言っています。イエス様が今バプテスマを授けていることを弟子たちは報告しています。ヨハネと並んでイエス様もバプテスマを授ける活動をしている、それによって、ヨハネとイエス様とを比較する、という状況が生まれています。人々は、ヨハネとイエス様とを比べて、どちらからバプテスマを受けようかと選んでいるのです。その中で「**皆があの方のほうに行っています**」、つまり多くの人がヨハネではなくイエス様からバプテスマを受けようとしている、ということが起っているのです。ここにはヨハネの弟子たちの戸惑いが見て取れます。つまりヨハネよりもイエス様の方に人々の思いが向いて行っている、このことをどうとらえたらよいのか、という戸惑いです。26 節は、ヨハネの弟子たちの心境がよく表されているのではないでしょうか。人間の争いのほとんどは、この感情を基としているのです。すなわち、人を妬む心こそが、人間の争いの原因なのです。

士師記 12 章には、エフタに詰め寄ったエフライム人の問題も同じことがありました。彼らはアンモン人に勝利したエフタに 1 節で「**エフライム人が集まってツアフォンへ進んだとき、彼らはエフタに言った。「なぜ、あなたは進んで行ってアンモン人と戦ったとき、一緒に行くように私たちに呼びかけなかったのか。あなたの家をあなたもろとも火で焼き払おう。」**」と詰め寄っています。なぜって、以前エフタがアンモン人と戦った時、彼らに助けを求めたのに、彼らは助けてくれなかつたからです。それなのに、今頃になって不平を漏らし、戦いを挑んでくるなんて、筋が違います。それは彼らの中に高ぶりとエフタに対する妬みがあったことが問題でした。

パウロは、コリントの教会に宛てて書いた手紙の中で、彼らは御靈の人ではなく、まだ肉の人だと言っています。なぜなら、彼らの間には妬みや争いがあったからです。それである人は「私はパウロにつく」と言い、別的人は「私はアポロに」と言っていたのです。アポロとは何ですか。またパウロとは何ですか。彼らは、あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であって、主がそれぞれに与えられた通りのことを行ったのです。そしてコリント第一3章6~7節で「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」と言いました。あなたにはこのような思いはないでしょうか。私たちは、直ぐに人と自分を比較しては妬みを抱いてしまいます。しかし、それはただの人、つまり、イエス様を知らない人と同じです。そうした思いは、ただ争いを引き起こすだけで、そこからは何も良いものが生まれてきません。ですから、もしあなたの中にこうした思いがあるならば、イエス様に赦していただきながら、神の御靈によって聖めていただかなければなりません。

3. 道を備える者

さて、27節でヨハネは「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることができません。」と言っています。これは、どういう意味でしょうか。人々がイエス様の方に行くのは、神がそうさせておられるからであるということです。それなのに、妬みを抱くことがあるとしたら、その神の主権を侵害することになります。私たちは、どんな場合でもそこに神の御手があることを認めなければなりません。

どうしてそういうことが起るのかが、28節に「私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです」と語られています。1章20節で語られていたように、ヨハネは「私はキリストではありません」とはつきり語りました。「それでは、何者なのですか。あなたはエリヤですか。」という問い合わせに対して彼は1章23節で、「私は、預言者イザヤが言った、『主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声』です。」と答えました。ヨハネの役割は、後から来られる救い主であるイエス様のための道を備えることなのです。

バプテスマのヨハネは、自分に与えられている立場がどのようなものであるかを、よく自覚していました。自分がどのような者であるかが分からぬ人は、とかく傲慢になります。パウロはコリントの教会の人たちに対して、コリント第一4章7節で「いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、人からもらわなかつたものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」と言っています。これはどういうことかというと、彼らが持っているものはすべて神からもらったものなのに、どうしてもらったものでないかのように誇るのかということです。彼らは、自分がどこから出発したのかを忘れていました。罪と汚れの中から、神の一方的な恵みによって、イエス様の十字架の贖いによって救われたのに、そして、その神の恵みとして御靈の賜物が与えられたのに、あたかも自分の力で得たかのように錯覚していたのです。しかし、どれ一つとして自分の力で得たものではないのです。それらはみな与えられたものなのです。そういうことが分かってくると、自分の分もまたおのずと分かってくるのではないでしょうか。バプテスマのヨハネは、自分に与えられていたものをよく自覚していました。「私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです」と言って、人々があの方の方へ行ったとしても、何の問題もありませんと言うことができたのです。

「謙遜」ということは、口で言うのはやさしいことです、実際にそれを行うということは、決してやさしいことではありません。特に、いかに人を蹴り落として自分が上に立つかを求めてこの競争社会の中に生きている私たちにとっては、本当に難しいことです。しかし、そのような中にあっても真に「謙遜」に生きる方法は、このバプテスマのヨハネのように自分に与えられた立場をわきまえ、そこに生きることなのです。

マラキ書3章に、あなたたちが待望している主、つまり救い主が来られることが告げられ、その前に「見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前に道を備える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、彼が来る。——万軍の【主】は言われる。」と1節に語られています。マラキが預言した、主の前に使者として遣わされ、主が来られる道を備える者、それが自分なのだとヨハネは言った

のです。だからヨハネの働きによって、人々は救い主であるイエス様を知り、イエス様のもとに行ってその救いにあずかっていくのです。神の御心によってヨハネのもとに来た人々が、イエス様こそ救い主であるというヨハネの証しを聞いてイエス様のもとに行き、イエス様を信じて救いにあずかっていく、それが神の御心なのです。旧約聖書の主な役割は、キリストが来されることを予め前もって告げることでした。そのキリストが来られたのです。ですから、ヨハネの働きが終わって、ヨハネが指し示していたキリストの働きが今まさに始まろうとしていました。

28 節後半には「**私が言ったことは、あなたがた自身が証ししてくれます。**」とあります。ヨハネの弟子たちが、ヨハネの証しを聞いてイエス様のもとへ行き、その救いにあずかるこことこそが、ヨハネが自分に与えられた使命をしっかりと果たしていることの証しとなるのです。だから、皆が自分のところにではなくイエス様の方へ行っているという報告は、ヨハネにとってはむしろ当然のこと、喜ぶべきことなのです。

4. 花婿の友人

29 節においてヨハネは、イエス様と自分との関係を「花婿」と「花婿の友人」というたとえで語っています。「**花嫁を迎えるのは花婿です。**」というのは、婚礼の主役は「花婿」だということです。その「花婿」とはイエス様です。自分は「花婿」の「友人」だとヨハネは言っています。「友人」は「そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。」のです。「友人」という言葉は、詳説聖書で「付き添い人」となっています。当時の婚礼において、「花婿」には男性の、「花嫁」には女性の「付き添い人」がついたようです。「付き添い人」は、あくまでも脇役です。「花婿」、主役であるイエス様に対して、自分は「付き添い人」、脇役なのだ、とヨハネは言っているのです。30 節の「**あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。**」という言葉もそういうことを意味しています。

3章 16 節には、「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」と語られていました。ヨハネがイエス様のことを「見よ、世の罪を取り除く神の子羊」と証ししたことの意味がここに語られています。神は、ひとり子イエス様を、私たちの罪を取り除くために犠牲となって死んで下さる小羊として与えて下さったのです。このイエス様による救いをヨハネは証ししていたのであって、この救い主のもとへと人々を導こうとしていたのです。これこそヨハネが彼の弟子たちに求めたことでした。そして、これはすべてのキリスト者にも求められていることです。キリスト者はみなこの「花婿」であるイエス様の「友人」であり、あくまでも主役はイエス様なのです。このことを忘れてはいけません。というのは、「謙遜」はこのことをわきまえることから得られるものだからです。つまり「謙遜」は、イエス様との正しい関係にあることによってもたらされるものであるということです。私たちは、「花婿」に仕える「友人」のように、「花婿」であるイエス様を喜び、イエス様に仕える者です。そして、「花婿」が「花嫁」と結ばれることによってその役目を果たし終えるように、イエス様によって成し遂げられた救いの御業が全世界に宣べ伝えられ、多くの人々が救われて、世の終わりに天において子羊の婚宴が開かれることを待ち望みつつ、主に仕えて行く者なのです。

5. 友人

さて、ヨハネがこのように自分を「花婿」の「友人」と位置づけていて、「**あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。**」と言っているのを読むと、何だか自分の人生には大した意味がないと言っているようでヨハネが可哀想だと感じてしまうかもしれません。しかしそうではないのです。この福音書の 15 章 14~15 節には、イエス様は「わたくしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。わたしはもう、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからです。」と語っています。イエス様が弟子たちを「友」と呼んで下さる、そこに大きな恵みがあることがここに示されています。イエス様の「友」となるとは、イエス様が父なる神から聞いたことをすべて知らせて下さることによって、父なる神の御心を行なうことができるようになる、ということです。「しもべ」と

「友」の違いもここに示されています。「しもべ」はただ命じられたことをその通りにするのであって、主人が何を思い、何のためにこれを命じているのかなどと考えることはありません。しかし「友」は、イエス様の御言葉を聞くことによって、父なる神がイエス様によって実現しようとしておられる救いの御心を知らされるのです。そしてその御心を自発的に行なっていくのです。ヨハネもそういう意味でイエス様の「友」なのだ、ということを、ヨハネの福音書は「花婿の友人」という言葉に込めているのです。そこにおいて、「花婿」の「友人」が「そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。」と語られていることは大切な意味を持ってきます。この喜びは、イエス様の「友」とされた者の喜びです。

このヨハネの姿に、イエス様の「友」とされた者はどのように生きるのかが示されています。イエス様の言葉に耳を傾けることによって、つまり父なる神がイエス様によって実現して下さる救いの御心をすべて知らされた者は、大いなる喜びに満たされて、イエス様こそ救い主であると人々に証していくのです。イエス様の「友」とはイエス様を証しする人です。

1章6～8節に「神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。」と語られていました。このようにヨハネの福音書は、ヨハネを、イエス様の「友」とされたことの大きな喜びの中で、イエス様の証しをするというとても大切な働きをした人として、同じようにイエス様の「友」とされ、イエス様を証ししていった信仰者たちの先駆けとして描いているのです。ヨハネは、イエス様の最初の「友」とされ、イエス様の言葉を聞いて父なる神の救いの御心を最初に知らされた人であり、その喜びを最初に味わった人であり、その喜びに押し出されてイエス様こそ救い主であることを最初に証しした人だったのです。

ですからこのヨハネこそ、イエス様を信じて生きる私たち信仰者の先頭に立っている人であり、私たちの模範です。模範と言うと、私たちが努力してこのような人になっていくことを目指す、という感じがしますが、そうではなくて、私たちも、イエス様のもとに来るならば、このヨハネのようになることができるのです。イエス様のもとに来ることによって私たちは、自分が神に背いている罪人であり、本来は裁かれ滅ぼされるしかない者であることを示されます。しかしそのような罪人である私たちを、神が愛して下さって、ひとり子イエス・キリストを与えて下さり、その十字架と復活によって罪を赦し、私たちが滅びることなく永遠の命を得るようにして下さったことをも示されます。

パウロは、コリント第二4章5節で、「**私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです。**」と書きましたが、それはまさにのことでした。あくまで主役はキリストなのです。そのことを忘れないでください。

バプテスマのヨハネは、この方を証しさえすれば、それでこの世における使命は終わり、消えていくのです。まさに彼の人生は、「**の方は盛んになり、私は衰えなければなりません。**」でした。それは、私たちの人生も同じです。私たちの人生は、この方を証しさえすれば、それで良いのです。それでこの世における使命は終わり、消えていくべき者にすぎないのです。私たちは、この神の定めを本当に理解しているでしょうか。それが本当に分かると、私たちの心は真の自由を得ることができます。私たちもこのバプテスマのヨハネから学び、彼のような生涯を送らせていただきましょう。あくまでも主役はキリストです。この方が盛んになり、私は衰えていかなければなりません。この方の声を聞いて大いに喜びましょう。キリストの心を心とする者、それが「花婿」であるキリストの「友」なのです。

私たちはバプテスマを受けて教会に連なり、礼拝を守り、御言葉を聞きつつ歩むことによって、このことを体験していきます。イエス様の「友」として、イエス様の御言葉に耳を傾け、その御声を聞く喜びの中で、イエス様こそが救い主であり、イエス様のもとでこそ、罪人である私たちが喜びに満たされて生きることができることを証していくのです。イエス様の友である喜びに生きる私たちにとっては、自分が主役になること、自分が栄光を受け、賞賛されることには必要ありません。イエス様こそが主役であり、イエス様が栄光を受け、イエス様のもとに来ることにこそ救いがあることを私たちは知っているのです。だから私たちはヨハネと共に、「**の方は盛んになり、私は衰えなければなりません**」と喜びをもって語ることができるのです。